
蒼穹と紅蓮のクアンタム

紅蜥蜴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼穹と紅蓮のクアンタム

【Nコード】

N70340

【作者名】

紅蜥蜴

【あらすじ】

異種との対話を終えた刹那が群雄割拠の時代へとダブルオークアンタと共に飛ばされる、それも孫呉の孫策（雪蓮）の元へ——こちらが主ではないので更新は他より遅いです。

ブログ 対話から…（前書き）

主に行っている連載のちょっとした息抜きでやっていきます。

最初からネタバレ全開ですので注意してください。

ミスマッチなのは解っていますのでそこを突っ込まれても答えません。

ブローグ 対話から…

破壊

「俺は戦う事しか出来ない破壊者、だから戦う、争いを生み出すものを倒す為に、この歪みを破壊する！！」

再生

「そうだ、未来を創る為に、俺たちは…変わるんだあああああああああ！！！！！！」

理解

「俺にも…生きていく意味があった…。」

戦っただけの人生だった俺、そんな俺も戦わずにELSたちとの対話が終わって地球に帰ってきた時には既に50年が経過していた。

年齢は既に70歳は越えている。

姿が白髪以外あの頃から変わってないのは、

もう嘗ての仲間たちは老いているか、生きていないだろう。

当然、昨日会ったマリナも老いていた。

だけど、時間が掛かっても漸く彼女に言いたかった事が言えた。

「貴女の言っていた事は正しかった」

彼女もまた、過去に俺が言った事を覚えていてくれて、そして認めてくれた。

お互いに分かり合う事が出来た瞬間だった。

そして、それが出来た後にマリナに最後の別れを告げて俺はELSたちが装甲の変わりになって姿の変わっているダブルオークアンタに乗り込む。

これからは、ELSたちの元で生きていく。俺たちも彼らも共存しているのだから、彼らの元で生きていくのもまた当たり前だ。

そうしてハッチを閉め、起動させた瞬間…

「なっ！？どういうこと…！うわあああああああああ！！！！」

何かに吸い込まれて機体ごと何かに飲み込まれてしまった。

（雪蓮）

それは突然のことだった。

空から大きな流星が私と祭が見回りをしていた付近に落ちてきた。

余程大きなものが落ちたせいか、落ちた場所一帯の木が折れ、粉塵が巻き起こっていた。

「けほけほっ、策殿、大丈夫か！？」

「いつつつ、大丈夫よ、それより行きましょう！」

すぐに向かおうとしたら、祭が私の左肩を掴んで止めてきた。

「いけませぬ、策殿はこれからの孫呉復興の為に必要なお方。何か

あつては堅殿に申し訳が立たん！」

言っている事は分かるが、何が落ちたか興味がある私は本能の赴くままに走って行く。

「ああもつ、お待ち下され策殿！！」

走って行くうちに粉塵が止み、私の目の前に飛び込んだのは…

青と白を基本とした鎧のような体と左肩に付いた大きな盾を巨人が片膝を付いてまるで私に頭を垂れるように佇んでいた。

でもそれ以上に特徴的なのは何を素材にしたのか分からない緑で透明な刃の付いた剣が左肩の盾に付いていた。

そして、その右手に盾に付いた剣と同じ素材の大剣を握っている。

「な、何これ…！」

人間と呼ぶにはあまりにも大きく、またあまりにも異質だった。

私は巨人の大きさに圧倒されて、口を大きく開けて啞然とするしかなかった。

「ぜえぜえ……策殿、この老軀をいじめる真似は…な、何と！」

息を切らせながら私に追いついた祭も驚愕の表情で青と白の巨人を見つめる。

「祭、これはどう考えても…」

こんな巨人はまず見たこともない。祭もそうだろう。

これが管輅の占いで出ていた天の御使いなのだろうか？

「うむ、天の御使い、のようじゃな。しかし、でかすぎるのお…。」

だけど、これだけでかいと目立ってしまう。袁術に見つかったら孫呉復興に支障が出てしまう。

「これは一刻も早く隠さないといけない…けど、その必要は無さそうね。」

私の視線の先には巨人の腹部、そこでお腹に付いた鎧のような部分がそれぞれ上下に避けていく。

中に何となく人が居そうな気がして、駆け出して行く。

「策殿、何を言って…！？ってまた先にしもうた！」

祭に構わず巨人の足をよじ登って巨人のお腹の部分へと辿り着く。

すると、そこには青い変わった鎧を着た人が顔全体を覆う兜らしきものを被りながら気絶していた。

「変わった鎧ね。それとも服…ではないわよね。さて、天の御使いが男だったらいんだけど、なっと！」

紫の透明なガラスのようなものに顔が覆われていて、どんな顔なのか分からないため兜のようなものを脱がす。

露になった顔立ちは正にカッコいい男、天に本当に感謝するわ。

「わあ〜！祭、ちょっと運ぶの手伝って。中に人が居たわ、しかも男よー！！」

「何じゃと！？今すぐ行くから少し待っておれ！」

男だったら、その血を孫呉に入れることで孫呉の未来は安泰になる。

この巨人と天の御使いで孫呉復興は益々現実に来る！！

でもまずは目覚めたら冥琳と一緒に尋問しないとね。

ブローグ 対話から…（後書き）

最初に言っておきますが、基本的にダブルオークアンタで戦う事はありません。

クアンタは戦い以外で使います。

後はイメージカラーで青なら魏だろと思う人も居るかもしれませんが、ここは私の好みを優先させてもらいました。

魏には一刀がいるという設定です。

理由はそれだけではありませんが、それは後程語ります。

呉01・孫呉との出会い（前書き）

感想にティエリアが抜けているという指摘がありました。今回最終決戦のからその後のことも書きましたので確認下さるようよろしくお願いします。

それどころか私も予想してなかった話の内容になってしまいました。

それにおかしいところも多々あるかも…。

呉01・孫呉との出会い

（刹那）

”クアンタごと飛ばされた後”

俺が目を覚ますと、クアンタはなく、何故か2つのGNドライヴとヴェーダの小型ターミナルユニットが俺と一緒に浮いていた。

ヴェーダの小型ターミナルユニットとは対話のすぐ前にティエリアがイアンたちに頼んでクアンタに取り付けたヴェーダの接続端末だ。対話の際にはELSから送られる情報を受け止めて整理などのティエリアが俺をフォローする際に使用された。対話が終わった後はティエリアが肉体を創り出して外宇宙航行母艦『スメラギ』に乗り込んだ為、機能してない。

ELSによって金属化していた体は、白髪以外元の状態に戻っていた。

だがそれ以前に青い光が満ち溢れたこの空間には見に覚えがない。

> あら、やっと気が付いたのねん？<

突然、持っていた携帯端末の通信が開き、手に持つと映像が出る。

そこには…筋骨隆々だが、禿げた頭に左右に三つ編みでピンクリボンで結んである黒い髪、たらこ唇が特徴的な…ある意味人間と疑い

たくなるような容姿の男が映っていた。

>だああれが、筋骨隆々だが、禿げた頭に左右に三つ編みでピンクリボンで結んである黒い髪、たらこ唇が特徴的な珍獣ですってええええええええええ！！！！く

モニター越しとは思えないぐらいの憤怒が男から感じられる。

珍獣とは言っていないは途中までは合っている。

だが、今はそんなことより状況把握が先だ。

「あんたか、俺をこの空間に引き摺り込んだのは。」

>そうよ、でも本来なら貴方がここに来ることはなかったはずなのよ。ごめんなさいねえ。 <

男は態度を変えて頭を下げて俺に謝る。つまりはこの男がこの男に
関係する者が原因ということが解る。

「なら何故こんなことになったのか、そして俺に何をして欲しいのか教えて欲しい。」

> 実は、これから貴方が行くのは外史という貴方たちのいう中国の過去の歴史とは違った世界なのだけれど、その世界に異端者が現れたのよ。 <

つまりは過去の中国を元にしたパレルワールドということか。しかし、日本語はともかく中国語はほとんど分からない。

王 留美、そして一応アレルヤの出身国ということ、武力介入したことで中国に触れる機会はなかった。

歴史については簡単に、文化については食べ物以外はほとんど分らない。

>その異端者は貴方のお仲間のティエリアというのと同じイノヴェイド…だったかしら。そいつが外史にやってきて外史を滅ぼそうとしているのよ。<

何故ティエリアのことを知っているのかは敢えて聞かない。

「それで、俺にその異端者を倒して欲しいということか。あとイノヴェイドではなく、イノベイドだ。」

>そうよお。その異端者はガンダム…つまりは貴方たちが使っている兵器も持っていて、外史に住んでいる人たちでは全く歯が立たないのよ。しかも、生身でもすごく強いし何か特殊な力を持っていて、その力で世界の干渉を無効にしちゃってるからお手上げなのよん…<

話から察するに、どうやら戦闘型イノベイドのようだ。

イノベイドの種類は対話の前にティエリアから教えてもらったことがある。

それとイノベイドは覚醒すると、個々に特殊な力を発揮することもある。聞いている。

>そうそう、貴方の機体を形成していたエルスと貴方たちが呼んで

いるものたちは貴方のいた世界に置いてきたわ。流石に連れて行っちゃったら、彼らとしても色々面倒なことになっちゃうからねえ。＜

E L S については仕方ないだろう。俺も仲間となった彼らが迫害に遭ったりするのは望まない。

中国の過去の世界を元にしたとなればE L S たちを受け入れてもらうのは不可能だろう。

「だがそうなる、このツインドライブもターミナルユニットも機能しない。」

いくらなんでもこれではM S を倒せないし、

> 機体は大丈夫よ。これで…ぶるああああああああああああああああああああああああ！！！！！！＜

男が地響きを起こせるぐらいの叫び声をあげると、ツインドライブの中心から光が拡がり、収まるというのまにかダブルオークアンタが宙を浮いていた。

…もう、あまりにぶっ飛んだことばかりが起きすぎて突っ込む気にもなれない。

> はあ、はあ…成功したと思うけど一応作動するか確認してね…。＜

何かエネルギーを使ったのか、疲弊しながらもウィンクをする男に少し寒気を感じながらクアンタに乗り込む。

「GNシステムリポーズ解除、プライオリティーを刹那・F・セイ

エイへ。」

念のため、起動するかどうか慎重に確認する。

見事に起動し、周囲のカメラ類に周りの光景が映る。

「それで、どうすればいい。」

携帯端末を片手に持ち、さっきの男に聞く。

>そのままであれば大丈夫よん。でも、この機体は異端者との戦い以外での戦いとかで使っては駄目よ。そんなことしたら、今度は貴方を排除しなきゃなくなるもの。<

それも仕方ないことだろう。この機体は戦いに使えば地上を荒らしてしまうこともある。いくら気を付けてもないと言い切れない。

「なら戦い以外でなら使えるのか？」

>移動とか、対話とかなら大丈夫よん。ついでに言うとソレを使つて元の世界に帰ることも出来るわよん。でもそれだと貴方の武器は銃だけになっちゃうでしょ？<

その通りだ。あっちでは銃弾は作れないから迂闊に使えない。

>だから、サービスで機体の武装……7つの剣をあなた本人が使えるようにしてあげるわよん。<

剣といったらGNソードVとGNソードビットか。

「分かった。」

>そろそろ着きそうねえ。それじゃあ、お願いねえ。あと、私の名前は貂蟬よお。<

携帯端末が切れて、眩しいぐらいの光が広がり、俺の意識は落ちていった。

気が付くと俺はベッドで寝かせられていた。だが、部屋を見ると俺が今までいた世界にはなかった様相をしていた。そう、中国にあったような装飾などが多く見受けられる。

窓から見ると朝なのか明るく、小鳥の囀りが聞こえる。明らかに地上にるのが分かる。

ならば、外史というのはどういうことだろうか？

「うむ、気が付いたようじゃのう。」

窓とは反対側から声を掛けられたのでその方向に顔を向ける。

そこには紫のチャイナドレスを着た白髪で褐色の肌の妙齡の女性が立っていた。

おそらく対話の時のスメラギやリンダとそう歳は違わないだろう。

「気分はどうだ、怪我はしとらんか？」

そう言われて半身を起こし、自分の体の状態を確認する。

特に怪我も無い、いや少し後頭部が痛い。

あとはパイロットスーツのままであること、白髪が元の黒髪になっていること以外は特に問題は無い。

「後頭部が少し痛いが大丈夫だ。」

「ああ、やはり駄目じゃったか。実は気絶しているお主を巨人の腹の中から引き摺り出す時に誤って地面に落としてしまったの。それで痛め止めの薬を塗っておいたのじゃが勢いよく落としてしまったから心配しておった、すまぬの。」

頭を下げた謝る女性。

だが、MSで長く戦っていたこともあって、強い衝撃などに体が幾分耐えられるようになっていた。

「いや、それは特に問題は無い。それより助けてもらったお礼と言っただけだが自己紹介をさせてもらおう。俺の名前は刹那・F・セイエイ、刹那と呼んでくれ。」

「姓が刹、名は那、字はえふ？真名はせいえい？変わった名前じゃないの。」

そうか、文化の違いで名前の呼び方も違うのか。

「違う。刹那が名前、Fがミドルネームという中間の名前、セイエイが姓だ。それより、真名とは何だ？どうやら俺とこの土地の文化

は違うのか、馴染みがない。」

それ以前に過去の中国にもそんな名前の呼び方はなかったはずだ。

何よりあるならアレルヤはともかく、王 留美にそういうものがあるか知っていてもおかしくない筈だ。

「何じゃ、真名を知らんとは。真名とは本人が心を許した証として呼ぶことを許した名前であり、本人の許可無く真名で呼びかけることは、問答無用で斬られても文句は言えないほどの失礼に当たるくらい大切な名前じゃ。当然、わしにもある。」

なるほど、迂闊に呼べない名前という訳か。いいことを聞いた。

「なら刹那が真名にあたるという事になるな。」

本名はソラン・イブラヒムだが、その名は既に捨てている。それに刹那の方が馴染み深い。

「何と、それは失礼した。わしの名は黄蓋、字は公覆。真名は祭さいじや。祭と呼んでよいぞ。わしも刹那と呼ばせてもらうからの。」

漸く名乗りが終わったので次の話をする。

「ここはどこだ？」

「ここは荊州南陽。我が主、孫策殿の館よ。」

孫策…確か西暦200年ぐらいの後漢の呉という国の武将として名高い人物だったはず。

という事は目の前の祭は本来男のはず。

これが外史と呼ばれた理由か。

という事は…

「…孫策の親は孫堅か？」

「そうじゃ、策殿の母君が孫堅。…やはりお主は天の御使いなのじやな。」

「おはよう、気分はどうかしら。あら、目覚めたのね。」

天の御使いについて聞こうとした時、この部屋のドアが開かれ、そこから胸の辺りが際どいチャイナドレスを着た俺とあまり歳の変わらない淡い桃色の髪と褐色の肌が特徴的な女性が入ってきた。

「策殿、冥琳からまだ入らぬように言われたではありませんか。」

「いいじゃない。それに私から色々言うこともあったし。」

女性は祭の近くまで歩を進める。

「後頭部が痛い以外は問題ない。あんたは？」

「私の名前は孫策、字は伯符。私と祭とあと一人、ここに来るから…と思ったら来たわね。」

この女性が呉の小霸王と呼ばれた孫策か。

そう思っていたら、ドアからまた人が入ってきた。

今度は胸元の開いたドレスのような赤い服に日本の昔話に出てくる天女が付ける羽衣、長い黒髪に孫策や祭と同じ褐色の肌で俺ほどの身長ではないが長身、そして四角の赤いフレームの眼鏡と特徴がこれまた多い女性が入ってきた。

「雪蓮、まだ入っては駄目だと言ったでしょ！」

孫策は叱られてブーブーとぶーたれている。

「全くもう…。」

「冥琳、せっかくじゃから自己紹介がてら尋問も始めてはどうじゃ？」

「そうだな、私は周瑜、字は公瑾。」

「俺の名前は刹那・F・セイエイ。刹那が名前だからそちらで呼んでくれ。」

「策殿、冥琳、刹那の名前はわしらのとは違うところがある。セイエイが姓で、えふが…えっと、何じゃ？」

「Fがミドルネーム、つまりは中間の名前という意味だ。だがこれで普段呼ばれることはない。」

「そうか、それだけでも文化が違うようだな。なら質問に入る。」

周瑜は真剣に俺の話に耳を傾けている。二人より生真面目な性格だということが窺える。

「まずは生地を聞かせてもらおう。」

生地……。早速答えづらい言葉が来たな。

「ここよりずっと西、砂漠と荒野が多い土地で生まれた。」

それを聞いた三人の表情が一気に険しくなった。

「では五胡が出身地なの？」

五胡の事は詳しく知らないが、誤解されているのは間違いない。

「違う。その五胡とは何ら関係ない。」

そう言っても三人とも納得してない。

「なら違うという証拠を見せてもらわないことには納得出来ないわね。」

「もし五胡、あるいは妖怪の類であるなら……死んでもらうことになる。」

孫策は物騒なことを言いながら持っている剣に手を掛けようとする。

だが、そこで以外な助け舟が来た。

突然、懐から携帯端末に通信が入ったという知らせのアラームがピピと鳴った。

「何の音じゃ？」

「すまない、俺のだ。」

誰かは分からない、それ以前にこの世界に来て通信が入ると思わなかった。

とにかく、端末を取り出しモニターを開く。

>よかった、出てくれたか。今どこにいるんだ？<

出たのはティエリアだった。

「な、何、突然人の顔が映った!？」

孫策は驚愕の表情でモニターも見る。だが好奇心旺盛なのか、目を輝かせながら見ている。

「俺も信じられないが、パラレルワールドにいるようだ。」

冷静に言っているが、孫策がモニターに顔を近付けているため、少し気が散っている。

>パラレルワールド…こっちに帰れるのか？<

「一応は帰れるらしい。だが、ここでやることが出来た。詳しくはあとで連絡する。それより、どうやって繋げたんだ？」

「クアンタに搭載されていたヴェーダの小型ターミナルユニットを介して通信回線を開いたんだ。だが、パラルワールドだというならターミナルユニットがあっても通信を開くことは出来ないはずだが…。」

「分かった、今はあまりゆっくり話すことは出来ないから一旦切る。」

そう言つて通信を切ると、さっきまで孫策以外は険しい表情をしていたのが、今は冷静にこつちを見ている。

「おほん、さっき証拠と言ったのだが、私達にも五胡にもああいうことも出来ないし、何よりあの蒼き巨人が何よりの証拠になることを忘れていた。許してくれ。」

周瑜が頭を下げて謝る。

「いや、疑いが晴れたのならそれでいい。で、天の御使いとは何だ？」

「ああごめんごめん、話が脱線しちゃったわね。管輅の占いで『天より降りしその者はこの戦乱の世を治めてくれるだろう、ある時は蒼き巨人、またある時は緑の巨人、またある時は白き羽衣を携えて舞い降りる』っていうのがあつて、貴方が入った巨人が私が巡回していた途中に流星のように落ちてきたのよ。あの時は吹き飛ばされるかと思つたわ！」

蒼き巨人は間違いなくクアンタ、白き羽衣は知らないが、緑の巨人というのが気になる。

「でなんだけど、刹那はどのくらい戦ったの？」

孫策は笑顔で、しかし殺気を以って俺に聞く。

一応今の俺は対話の時…つまりは23歳の時の容姿だ。

「…20年近くだ。俺の人生は戦うだけの人生だったからな。」

50年はELSとの対話に費やしたが、残りは正に戦いに明け暮れる日々だった。

「…どうやら本当みたいね。殺気を向けても全く動じないんだもの。というか逆に私の方が参っちゃいそうよ。」

殺気を向けた覚えがないんだが、どういうことだろう？

「で冥琳よ、こやつの処遇はどうする？」

「私は何も問題ないと思います。彼の人格、彼が私たちとは違う人間、彼の我々にはない知識、そして雪蓮の殺気に動じない精神の強さ、問題になるところがないどころか我が孫呉に欲しい人材です。あとは雪蓮次第ですね。」

「私は問題ないわ。…それにしても、やっぱりかっこいいわね。」

「それはわしも思っていたぞ。なかなか見所のある男じゃ。」

「なら真名を教えてあげる。私の真名は雪蓮よ。」

「そういうことなら私も。私の真名は冥琳だ。よろしくな刹那。」

冥琳が手を伸ばしてきたため、俺も握手をする。

「ふふ、刹那、あなたを条件付きで保護してあげる。」

正直、住む場所があるのはありがたい。勉強しなければ話が出来ても言語の読み書きが出来ないのは色々苦労するからだ。

しかし条件か…それはそうだ、ただ保護などこの荒れた世界では考えられない。

「一つは貴方の持つ知識を我が国孫呉の為に役立てること。」

これは問題ない。MSのことを教えたところで悪用も生産も出来ないのだから。

「二つは、私達呉の武將を口説いてまぐわって。」

これも問題…ん？

「すまない、二つ目をもう一回言ってくれ。」

「だから、私達呉の武將を口説いてまぐわってね。勿論、それぞれの同意を得てからよ?」

これは俺にとって、対話や戦いよりも困難なように聞こえた。

ここから、俺の新たな絆と戦いが始まった…。

だが……早速前途多難になってしまった…。

.

呉01・孫呉との出会い（後書き）

次は刹那が雪蓮たちと一緒にダブルオークアンタのある場所へ行きます。

次も今後の話の基本を含んだ内容なので出来るだけ早く更新しますが、その次からは更新が不定期になると思います。

呉02・蒼き巨人〰〰〰 Quant〱〱〱（前書き）

お待たせしてすみませんでした！

漸く更新出来ました。

ですが、活動日誌にある通り、余裕が無くなっています。

なので、卒業論文が終わるまでこっちの小説は更新出来ませんので
予めご了承ください。

〱刹那〱

雪蓮から保護する条件を聞いて啞然としていた俺だが、結局他に宛てもあるはずも無かったので少し渋々だが了承した。

そのついでに雪蓮が「刹那だったら、いつでも良いからね。」とウインクしながら言っていたが、冥琳が「私も一応賛成だが、無理にやるうとはしないでいいぞ。」とフォローしてくれたことで漸く我に返った。

「俺と子どもを設けたいということだが、目的があるのだろうか?」

正直、あまりいい目的ではないのは予測出来る。しかし、この時代と俺がいた時代はあまりに考え方が違う。何より、ここでの語学などこの国の知識に疎い。

だから無闇に否定しない方がいいだろう。

「勿論よ。天の御使いの血を孫呉が受け入れ、子孫を残せば権威で逆らうものも少なくなる。でも誤解しないで欲しいのは、権威が目的ではなく、それによって統治がしやすくなり、犠牲も少なくなる。」

要は結果的に平和に繋がるということか。

「そういうことなら構わない。」

当たり障りなく答えたつもりだったが、雪蓮は何が気に入らなかったのか頬を膨らませて苛立ちの表情を見せる。

「むっ！何、刹那はこれだけの美女に囲まれてそんな無表情なんてもっと慌ててくれてもいいじゃない！！」

「すまない、あまりそういうことはよく分らないんだ。」

実際は戸惑っているのだが、ややこしくなりそうなので伏せておく。

「はあ、お主は鈍いのお。策殿、これはある意味苦勞しそうじゃのう。」

祭が溜め息混じりに言ったことに同意した雪蓮も溜め息を吐く。

「苦勞するのはこっちです。二人とももう少し私の苦勞を勞つてくれませんか？」

二人が溜め息を吐くのを見て冥琳も二人に対して愚痴を言い出す。

「…ってこうしている場合じゃなかったわ！刹那、早速だけど、貴方にあの蒼い巨人をどうにか隠してもらいたいのよ。あの巨体を袁術に見つけられたら大変よ。」

たとえ俺しか動かせなくても、民間人にとっては下手をすれば大軍よりも脅威的なものになるだろう。

実際、クアンタ…いや、ガンダムの装甲はEカーボン製でGN粒子

をコーティングすることによってビームにもある程度耐えられるぐらいの強度を誇る。

到底この時代の武器で壊せるものではない。

「了解、すぐに向かおう。」

雪蓮に賛成なのか、祭と冥琳も何も言わない。

「祭、穩を連れてきてもらえる？あの子にも見せておきたいからね。」

「心得た。見つけ次第、巨人の座るところへ向かおう。」

祭は駆け足で部屋を出て、穩と呼ばれた人物を呼びに行った。

「お願いね。私達は兵士を沢山連れて巨人を運びましょう。」

「いや、その必要は無い。俺が動かして移動させれば、問題はない。」

「そんなことが出来るの？」

「むしろお前たちが言っている巨人…ダブルオークアンタは俺しか動かせない。それに数人なら掌に乗ってもらえればまとめて移動できる。」

「分かったわ、なら冥琳。」

「分かっている。…誰かある！」

「はっ！」

冥琳が呼び出すと、ドア付近にいた兵士がこちらに向いて指示を待つ。

「黄蓋殿に『兵士は連れて来ず、穩だけ連れて来てくれればいい』と伝えてくれ。」

「御意！」

兵士は冥琳の伝言を聞いてすぐに祭を探しに行った。

「それにしてもあの巨人、だぶるおー！くあんたって言うんだ。でも面倒だから“クアンタ”で良いわ。」

雪蓮は喋りなれない言葉だからか、確かめるようにクアンタの名称を言う。

「その、クアンタとは天の世界ではいくらかでもあるものなのか？それに剣を持っていたから、兵器なのだろう？」

「いや、あの機体は俺専用のガンダムだ。そしてクアンタは兵器だが、それだけではない。」

「がん…だむ？それに兵器だけじゃないって他に何かあるの？」

雪蓮と冥琳が興味津々に聞いてくる。

特に雪蓮が初めてエクシアを見たときのような好奇心な目をしていた。

「二人とも、興味があるのは分かるが、先に祭が来て待たせていては彼女に失礼だ。」

「そうね。雪蓮、行きましょう。」

雪蓮も冥琳の言葉に納得して、俺たちはクアンタが落ちた場所へと向かう。

雪蓮たちの館を出て1時間程歩いて、座りながら佇むクアンタの元に着いた。

すると初めてクアンタを見た冥琳は口を大きく開けて見上げながら感動していた。

「これが蒼き巨人…正にその通りね。それにあの右手の剣と左肩の盾に付いてる剣に使われている刃はどの勢力でも作るのとは不可能でしょうね。あんなに透き通った緑の宝石のような剣は宝剣と言っても良さそうな出来ね。雪蓮の言った通り、ここに置いておく訳にはいかないわね。」

「改めて見ると凄いわねえ…。でも、祭と穩はまだ着いてないようね。」

雪蓮がクアンタの周囲を見るも、祭の姿が見えない。

「ん？あそこにあるのは剣じゃないか？しかも、7本もあるぞ。」

と冥琳がクアンタの足元を指差しているのを見ると、そこには人が扱えるぐらいの大きさになった長短の分かれた3種類のソードビットが2本ずつ、中心に地面に刺さっているGNソードVを囲むように配置されていた。

「あれってクアンタに付いている剣と同じじゃない？」

これはおそらく、貂蟬が創ったものだろう。あるいは誰かに創ってもらったのだろうか？

そんなことを気にしても仕方ないので、GNソードVとソードビットが刺さっている場所へと向かう。

「雪蓮、俺が中心の剣を引き抜くから、その後に足元にある剣を引き抜いてみてくれ。」

俺に指示された雪蓮が足元の短い方のソードビットを座って見ると眉尻を下げて困ったような顔になる。

「…でも、この剣というか周りの剣は柄が無いわよ？」

「雪蓮、まずは刹那を見ていきましょう。」

俺は二人のことは気にせず、GNソードVを引き抜く。重さはあまり感じず、すんなりと。

どうやらgn粒子でコーティングをしてあるらしく、質量軽減の効果も働いているようだ。

「やっぱり凄く立派ね。岩も切れちゃいそう！」

「なら雪蓮、試しに持ってみてはどうだ？」

他人にもGNソードVが使えるかどうか試してみるため、敢えて雪蓮に渡してみる。

「どれどれ？…うそ、南海霸王より長いのに軽い！！ちょっと冥琳も持ってみて！」

「でも私はあまり力はない…分かったわ。」

雪蓮は興奮気味に冥琳にGNソードVを渡す。冥琳は渋々柄を掴む。すると、冥琳も雪蓮と同じように目を見開いて驚く。

「本当に軽い！これなら片手で振っても重さに振り回されることはない。」

冥琳は思わず横に縦に振ってしまい、危うく俺に当たりそうになった。

その俺は左手で長い方のソードビットの柄を掴んで刃を受ける。

「気を付ける冥琳。」

「う、ごめんなさい…つい…。」

「もう駄目よ冥琳、子供じゃないんだから。」

雪蓮が悪乗りして冥琳を責めているところに祭と10代後半から2

0歳ぐらいに見えるのんびりとした空気を醸し出している女性が歩いて来た。一番近いのはリンダだが、彼女の雰囲気はより伸び伸びしている。

正直ああいう雰囲気はあまり慣れない。

「全くじゃのう。」

「でも珍しいですよ、普段は冥琳様が怒る方なのに。」

祭も隣の女性も面白そうに冥琳を見る。

「あら、来たのね祭、穩。」

「はい、たつた今到着しました。」

俺は三人が喋っている間に、冥琳からGNソードVを受け取る。

「しかし、何じゃその剣は。随分変わった形しとのう。」

祭はまだ地面に刺さったままの5つのソードビットを見る。

「祭、見覚えない？」

「見覚えなど…何じゃと!？」

剣の正体に気付いた祭は驚愕の表情で地面とクアンタにマウントされている方のソードビットを見比べる。

「同じ剣が蒼い巨人にも付いてますね。しかも大きさ違いで。」

「こら穩、刹那に挨拶しなさい。」

「ああ、すみませう。私は姓が陸、名は遜、字は伯言、真名は穩です。」

冥琳に促され、穩が俺に挨拶と自己紹介をしてくれた。

「俺の名前は刹那・F・セイエイ、刹那で呼んでくれ。それと祭も聞いて欲しいんだが、蒼い巨人と呼ばれているのは、ダブルオークアンタという名前がある。」

「そのままだと面倒だからクアンタでもいいわよ?」

俺もクアンタのことを言いがてら自己紹介をする。そこに雪蓮が割り込んでくる。

「分かりました。よろしくお願いしますね。それで早速移動するんですけど、刹那さん、どうしますか?」

「まず、俺がクアンタに乗り込み、左手を下ろす。その左手に剣を全て乗せてくれ。次に乗せたところで、4人とも右手と左手に乗ってくれ。」

「左手はともかく、右手の剣はどうするんだ?」

質問したのは冥琳。最もな疑問だ。

「それは腰に取り付けることが出来るようになっていいるから大丈夫だ。だが時間を少し掛けてすぎている、急ごう。」

俺は雪蓮たちの返答を待たずにクアンタのコクピットまで跳んでいく。

コクピットに乗り込んだら、コクピットハッチを閉め、システムのリポーズ（英語で休止だが、ここでは太陽炉以外のシステム停止を意味する）を解除、起動させる。映像が出たところで、足元にいる雪蓮たちを見て、外部音声を入れる。

「皆少し下がってくれ。」

雪蓮たちは驚くが、すぐに離れてくれた。

離れたところで、GNソード？を左の腰のサイドアーマーにマウント、クアンタの左手を掌を上にする。

そこに小型化したGNソード？とソードビットを全て置き、開いた右手に冥琳、祭、穩が乗るが、一人しか座れるスペースがなかったため、右手に穩が座り、胸部の白いクラビカルアンテナに冥琳と祭がしがみ付いている。

そして雪蓮はというと…

「ふう、掴むところが多くて助かったわ。」

クアンタの足を登って、コクピットの辺りまで来た。そのままでは

危ないため、已む無くコクピット内部に入ってもらった。

「へえ、中はこうなっているのね。しかも、どうやっているのかは知らないけど外が見えるわ。」

「出来るだけ俺の後ろにいて欲しいのだが…。」

「うーん、いやよ、足が痛くなりそうだし。刹那の前にするわ。」

と言って、俺の首に手を回しながら膝の上に座る状態になっている。

「その兜ちようだい！…うーん、でも髪飾り外したくないし、止めた！」

座る際に被っていたフルフェイスのヘルメットを取られて雪蓮が被ろうとしたが、髪飾りが邪魔になり被れず座席の後ろに置かれた。クアンタに人を乗せ、ここまで好きに動かれたのは初めてだがあまり気にしない。

本音を言えば、動きにくく正面のディスプレイが見づらい。それと名前は分からないが花の香りがする。

あとは密着しているせいか、胸が当たっていて、内心動揺している。

「冥琳、祭、穩、なるべくゆっくり動くが、落ちないように気を付けてくれ。」

どうにか平静を装い、外の三人の様子を確認する。

大丈夫だ。

いつでもよいぞ。

私も大丈夫ですよ。

「雪蓮もいいな？」

「ええ。」

「ダブルオークアンタ、刹那・F・セイエイ、これより雪蓮たちの館に向けて飛翔する。」

四人の是非を確認したところで、機体を上昇させクアンタが両手で抱える格好で発進する。

（雪蓮）

私は今、蒼い巨人の『クアンタ』の中にいる。

独特のヒュオオオオオオオオオオという音が聞こえてくるのは刹那曰く「動力が回転して動いてる音」らしい。

思ったより狭いが、仕掛けが色々とあるようで面白そう。

「ねえ、押してみてもいい？」

と前の箱のようなものにある指で押せそうな箇所を指差してみる。

「駄目だ。今押すと冥琳たちが落ちてしまう。」

つまんない、と言いたいところだけど、今周りの山よりも高い位置を飛んでいる。

流石に本当に落ちたら死んでしまうから止めておこう。

それにしても…こうして空から見ると、私達が住むこの土地ってこんなに広がったのね。

これで漸く孫呉復興の夢が始まる。まずは力を付けないとね！

「おい雪蓮、右手を押すな！」

気付かないうちに刹那の右手に手を重ねていて、それと共に手で握っている船でいう舵らしきものを押して動いてしまう。

「へっ、ひゃあああああああ！？」

すると、いきなり馬が走るより速く右回転し始めてしまった。

あまりの速度に悲鳴をあげてしまう。

（なっ、きゃあああああああ！！）

（おっ、速い速い！もっとやれい！！）

（落ち、落ちちゃいますっつっつっつっつっつ！！）

「くっ、雪蓮早く手を離せ！」

刹那に言われてすぐに手を離したら、刹那が押してしまった舵を引いて元の速度に戻してくれた。

「ふう、三人とも大丈夫か？」

（わしは大丈夫じゃ。穩は大丈夫か？）

（目…目が回ってますが何とか。）

（……………うつ。）

祭と穩は返事をしてくれたが、冥琳の返事がない。

ていうか祭私だって気分が悪いのによく平気よね…。

「冥琳？」

「気持ち悪くなったのか？」

（…うつ、ひつく、聞こえていたぞ雪蓮。後で、覚えていなさい…。）

冥琳はどうやら怖かったらしく、涙声ながらドスが利いた低い声で私に死（という名の説教）を宣告した。

「…自業自得だ雪蓮。それと後ろにいてくれ。」

「…『めんなさい。』」

今度は刹那の言うことを大人しく聞くことにした。

…ああ、後が怖いわ…。

〈刹那〉

雪蓮のせいで一悶着あったもののその後は無事に館の入り口付近に到着した。

ただ、雪蓮だけは到着した後もずっと暗かった。余程冥琳の説教が嫌なのだろう。

「誰がある！…そこに置いた緑の刃の剣を天の御使いの部屋へ運んでおいてくれ。重さはそんなに無いがよく切れるから三人ぐらい呼んでから行ってくれ。」

「はっ！」

だが被害者の冥琳は冷静に兵士を呼んで予め地面に置いたソードビットを運ばせていた。

「うっ、気分が良くありません。」

「ええい、情けない！穩、しっかりせい！！」

「祭さんがかかしいんですっつ。」

祭は気持ち悪くなってへたり込んでいる穩に何故か説教している。

その光景を見て思わず苦笑してしまう。

「さて刹那、雪蓮の説教は後で出来るからいいけど、クアンタをどうやって隠す？」

冥琳は隠し方を聞いてくるが、もう既にどうするかは決めている。

「クアンタには姿を見えなくする機能もある。少し待ってくれ。」

正確には迷彩被膜と言って、主に粒子の特性である通信やレーダーだけでは隠れきれない、または逆にその特性を利用して発見されないように視覚で隠れる機能である。武力介入開始時は待機時などによく使っていたが、ダブルオーガンダムに乗り換えてからはほとんど使わなくなった。

それでもクアンタにもその機能は搭載されている。

「GNシステムリポーズ開始、迷彩被膜展開。」

俺の指示でクアンタは姿を消した。ただし、飽くまで見えただけだ。

「消えた！？」

そう言つて冥琳はクアンタのある場所へと歩き、右手を前に出してみる。すると、手が何かを押すような形で止まった。

「なるほど、ここにはあるけど私の目には何もないように見える。隠すには打ってつけたが、ここでは誰かが間違つてぶつかつてもお

かしくないな。」

「冥琳はどこがいいと思う?。」

彼女ならいい場所を考えてくれるだろう。

何分、袁術がどんな人物かが分からない以上、俺だけで判断するのは危険だ。

「この大きさなら裏に森とその先に湖があるからそこに置けばどうだ?そこにはまず私達以外で来るものはいない。」

それで納得した俺はすぐにクアンタに乗り、その場所へと向かった。

数分後、冥琳が言っていた森を抜け、湖まで辿り着いた。

空から誰もいないことを確認し、着地する。

クアンタを座らせヴェーダに通信を繋げると、ディスプレイから小さなティエリアの姿が現れた。

「少し落ち着いたから、状況を説明する。」

「分かった、話してくれ。」

ティエリアに簡単に説明すると、ティエリアの表情が段々と渋くなっていた。

「君の話からすると、後漢時代末期といったところだろう。しかし、真名というのがあること、孫策など歴史上の人物が女性になっていること、そして…何故か本来いるはずの孫堅がいないことなど相違点が多い。やはりパラレルワールドだという線が濃厚だな。」

「孫堅というのは？」

「本来なら孫策の父親というのが普通だが、ここではおそらく母親だろう。いないと言ったが、既に亡くなっているという可能性もある。」

ティエリアは量子演算システム「ヴェーダ」とリンクしていることで情報を引き出すことも出来る。

当然、歴史も引き出せるが、どうやらヴェーダ、ひいては俺たちの知る歴史と違いが多いようだ。

「つまりは、どのみち俺達の知る歴史通りになることはないということか。」

「そういうことだ。」

しかし、どちらにしても同じだ。この世界にイレギュラーとなっているイノベイドがいる限り。

「ならティエリア、頼みが…。」

「言わなくても解っている。その強力な力を持ったイノベイド、どうにも気になる。過去…それもソレスタルビーイングが武力介入開始前までにヴェーダの元に戻るでもなく消えたイノベイドが1人い

るらしい。詳しくは解り次第連絡する。」

ティエリアはそう言って姿を消し、俺もクアントのリポーズを開始、迷彩被膜で隠して雪蓮たちの館へ戻っていった。

.

呉02・蒼き巨人〰〰〰 Q u a n 「 T 」 〰 (後書き)

何というか、今のところ刹那としては冥琳が一番好感持てるという感じの印象になってしまっています。それと性格違っちゃっているか心配になってきました。

あと、プロローグと呉01とでおかしなところがあったので余裕が出てきたら修正します。物語に関わるものではないのですが、説明不足というのも変なので。

呉03・黄巾党からの奪還（前書き）

まずは東北関東太平洋沖地震での犠牲となった方への哀悼の意を表します。

そして、日本の復興を願っている皆様に御礼申し上げます。

私も2000円と少ないですが、義援金とある市役所を通して救援物資を少し遅らせていただきました。

私は2日間の断水と停電、約2週間のガソリン不足で済みました。

約2ヶ月ぶりの更新となっていました。特にこの小説が約4ヶ月ぶりで大分待たせてしまいました。

その割りに中身が薄くなってしまったのは私の不徳の致すところでもあります。

しかし、活動報告で書いた通りあまり安定した状況ではまだないため、不定期更新におそくなってしまうかと思っています。

そのところをご勘弁願いたいと思います。

呉03・黄巾党からの奪還

（刹那）

この世界に来てから数日が経ち、目が覚めた俺だったが未だにこの世界の空気に慣れないのか、イマイチ動きが鈍い。

それでも雪蓮たちの、呉という国にいる以上は慣れる必要がある。

この数日間で、GNソードVとGNソードビットの仕組みを調べてみた。

解ったことは、俺の脳量子波でそれぞれの武器の形態を変えられることだ。

GNソードVはライフルモードへの切り替えとビームの発射が出来る。ソードビットとの連結によるバスターソードも気絶しない限りは出来る。

しかし、バスターライフルは連結出来ても砲撃もライザーソードも出来なかった。

ソードビットは連結の他に、リング状に展開することで出来るGNフィールド、収納したグリップを展開した状態での剣としての役割、そして本来の使い方であるビットとして全方位からの攻撃と用途が多い。

ただし、ビットだと半径20m、時間だとおよそ1分が限界だ。

自分が寝ていた布団から出て、ネイビーのアンダーズーツから変えのアンダーズーツとクアンタに何故か入っていた青いソレスタルビーイングの制服へ着替える。

が、着替えている途中でドアが開いた。

「おはよう刹那、冥琳から話がある……ってあら、良い筋肉してるのね。」

入ってきたのは雪蓮で、近付いて二の腕を触ってくる。

幸い、既にズボンは履き終えているものの上半身裸だ。

本当はあまり気にしないのだが、いつだったかトレミー内でフェルトが俺の部屋に入ってきたことがある。その時に上半身裸で顔を真っ赤にして退出したというのをスメラギに見られ、『女の子の前であまり上半身裸は見せては駄目よ。フェルトは刹那が気になっているんだから。』と言われたことがあったのを思い出した。結局、何故フェルトの何を気になっていたのか聞けずじまいだったが。

擦くすくつたいこともあつて、雪蓮に背を向けて着替えを続ける。

「雪蓮、次から用がある時はドア……戸を叩いてくれ。流石に着替えているときはいきなり入られると困る。」

「天の国ではそうなの？」

彼女に悪気はないのは昨日で解っているが、『天の国』と呼ばれて

いることには少し抵抗がある。

対話が終わった頃にはほとんど紛争が無くなっていたものの、今までの人生を思うと綺麗な部分だけを雪蓮たちが見ているような錯覚をつい覚えてしまう。

…こんなことを思うとは俺もまだまだだ。

「ちょっと、無視しないでよ！」

と背中を向けながら横目に見る。すると雪蓮が質問されたのに答えなかったことに腹を立てたからか、睨みながら頬を膨らませて不機嫌そうにしていた。

ジャケットを着て雪蓮の方へ向き直す。

「すまない、考え事をしてしまった。…天国という言葉は少し違和感を感じるんだ。俺がいた世界では争いが絶えることはなかった。」

俺の言葉を聞いた雪蓮の表情が真剣で怒りを含んだものへと変わった。

「違うわ、争いが絶えないのはこっちも同じよ。特に最近では黄巾党という女子供関係なく民を殺して物を奪う集団がいる。冥琳の話はそのことについても含まれているわ。とにかく付いて来て。」

着替え終えた俺は黙って付いて行った。

雪蓮に付いて行くと、庭園で冥琳の姿が見えた。

そこで祭と穩も話し合っている。

「来たか。」

「ここで話すということは、漏れてはまずい内容なのか？」

「そうじゃ、よく分かったの。が、今その話は終わったところじゃ。」

分かった理由は、ソレスタルビーイングが武力介入を開始したばかりの頃にマイスターで軌道エレベーター・天柱へ集合する時に周リへの警戒として同じようにしたことがあったからだ。ただ、俺たちの場合は念を入れるという意味合いの方が強かったが。

「それで、雪蓮から冥琳が呼んでいると聞いてここに来たのだが用件は何だ。」

「うむ。実は刹那には武官と文官のどちらかで働いてもらいたいのだが、どちらが得意だ？」

冥琳が聞いてきたのは呉での今後の俺のあり方だった。答えは決まっている。

「武官だ。元々、俺には戦うことしか出来なかった。」

今は脳量子波での対話も出来るが、やはり長年積み重ねてきた戦いが俺に一番出来ることだ。

「そうか…本来なら祭と一手手合わせしてもらって実力を確かめると言いたいところだが、実は最近国中を蔓延ってる黄巾党という一団が私達の領土にある小さな村を襲っているという報告が今しがた入ってきたんだ。」

雪蓮が言っていた集団か。格差と貧困が多いこの状況では酷いことになっているだろう。

「つまりは、誰かと一緒に討伐をしに行けということか。」

「察しが早くて助かる。刹那には祭殿についていってもらうことになる。」

「それを聞いた以上は、実力を試す目的でなくとも、たとえ一人でも俺は行く。」

ソレスタルビーイングのガンダムマイスターは、争いを生むものを倒す存在。

今の俺は対話から入るが、通じないのであれば武力を以って駆逐しなければならぬ。

人と人が分かり合えること、たとえ相手が牙を剥こうとも、相手が少しでも分かり合う気持ちを持っているのなら通じるのだと信じているのだから…。

クアンタに乗っていく訳にはいかなかったため、予め用意された馬に乗って移動している。

祭と共に向かうのはいいが、俺は今まで馬に乗ったことがない。それ以前に馬のように生きている動物に乗ったことが無いのだ。そして、今回は時間がなかったためにソードビットは置いてきた。

だが乗り心地はそう悪くはない。MSの速さに慣れていたせいか、馬の蹄で地を蹴る音を楽しめるぐらい馬の走る速さをそう速く感じなかった。むしろ風を感じることも楽しむことも出来た。

だが、風によって火によって焼けた土と血の混ざった臭いが運ばれて来た途端に気を引き締める。

村と思われる石造りの古い民家が幾つもある集落、ただしその民家から火の手が上がり、民家の周辺は村人と思われる男、老人、子供まで血を流していた。

「おい、大丈夫か!...」

馬から降りて、倒れてる村人に声を掛けるも、全て息絶えていた。

あるものは心臓を一突き、あるものは斬首、あるものは背中を袈裟懸《けさが》けに斬られている。

「ぬう、随分やられておる…。酷い惨状じゃ。」

祭は悔しさと憂いを帯びた瞳でその惨状を見渡す。

その惨酷な光景から、もうずっと思い出すことのなかったガンダムに出会う前の… K P S Aで少年兵として戦わされたあの記憶を思い出す。

だが、思い出して立ち止まっている場合ではないと首を振って意識を目の前の惨状へと戻す。

がふと見直すと女性が一人としていないことに気付く。

「女性が一人も見当たらない、奥へ向かう！」

嫌な予感がした俺は祭に呼び掛けることも忘れて駆け出す。

「あつ待て、刹那！」

生存者がいるかもしれないと思い、先へと進む。

奥へと急ぎ走ると、俺たちが通った所と反対側である村の入り口にたどり着く。そこには剣を首筋に突きつけられて怯えている女性と、黄色のバンダナを被った男が三人で女性を脅していた。

俺は燃えきつて炭になった建物の陰に隠れる。

「おい答えろ、お前はここで俺の女になるのか、それともここでひん剥かれて全裸のまま犯されて死ぬのか、どっちだ！」

顎鬚を生やした男が女性に向かって怒鳴りつける。

怒鳴られた女性は怯えるあまり、涙を流すも声が出ないようだ。冬の寒さに悴《かじか》んでいるように齒を力チ力チ鳴らしているあたり、余程恐がっているのが解る。

…急いで開放しないと自分で舌を噛み切る、なんて最悪な結末にもなりかねない。

対話をする前に女性を救わなければならない。

「へへへ、兄貴よお、早く犯しちゃおうぜえ!」

「早くこの女を孕ませちまおうぜ!」

…前言撤回、この男たちは救いようが無い。

その歪みを駆逐する。

足元にある石を左手で拾い、サイドスロー気味に投げる。

投げてすぐさま駆け出す。

「がつ!」

投げた石は女性の後ろにいた男の眉間に命中する。

「何者、ぐへえっ!」

それを目で確認する前に、剣で脅していた男の顔面に飛び蹴りをし

て吹き飛ばす。

「あ、兄貴！てめえ、この野郎！！」

短剣で横から斬りかかる残りの一人。

「しゃがめ！」

「きゃあ！！」

女性の返答を待たずに肩を掴んで、一緒にしゃがんで避ける。

避けたところで、GNソードVで短剣の刃を斬る。

切れ味が鋭く、断面が綺麗に見えていた。

「なっ、剣が剣に斬られた！？…ひいつ！！」

半ばから切れた短剣を凝視している男に切っ先を向ける。

「言え、貴様たちは何故こんなことをする！！」

「ぐっ…決まってるだろ、生きるためだ！そのためなら他人なんてどうでもいいんだよ！！」

地に這い蹲りながら、狂気を孕んだ笑みで答える三人のリーダー格である男。

大方、漢王朝への当てつけという名の八つ当たりを苦しんできた自分たちなら許されると自分勝手な考えを持ったことで人から様々なものを奪うことに抵抗を持たなくなつたといつたところだろう。

石を眉間にぶつけた男が気が付いたか。

「生きるために……他人に犠牲を強いることは間違っている！ そのの貴様も同じだっ……！」

女性の後ろにいた男が剣を振り上げていたため、すぐに刃の根元の部分を斬り落とす。

「は？ げふっ！！」

男が刃のない剣を凝視している間に右足のミドルキックで脇腹を打つ。

男は地面を転がって5 mぐらいで停止、泡を吹いて気絶した。

「だつたら、女を……」

短剣を折られた男が女性の首に手を伸ばそうとしたのが見えた。

止むを得ず、GNソードVを脳量子波でライフフルモードへ切り替える。

そして、GNソードVに付いている二つの銃口から桃色のビームが放たれ……女性の首を掴もうとした両手を消し炭にする。

[illegible]

A a a a A a あ！！痛い、痛い、痛い
い い い い い い ！！」

両手が無くなった男が地面に倒れ、痛みでのたうち回る。腕の先が黒くなっていて痛々しい。

「な、何だこの男…まさか、天の御使いがここにもいたっていうのか!？」

女性を庇いながら聞こうとしたところで、後ろから足音がする。

この感じは、祭か。

「どういふことだ、天の御使いが他にいてもいいのか!？」

祭は右手の剣を左手の弓と一緒に持ち、逃げ出そうとしたリーダー格の男の胸倉を掴む。

「さあな、そんなのは自分で調べな！」

祭の凄みのある剣幕にも関わらず男は不遜な態度でまともに答えようとしなかった。

脳量子波で何を考えているか調べても、残念ながらフリーダー格の男を含めて、三人とも俺たちをいかにやり過ぎるか、そしてどう仕返しするかを考えていた。

結局、他に天の御使いがいるのかはつきりしないまま、祭と共に男たちをその場で処刑した。

.

呉03・黄巾党からの奪還（後書き）

黙っていようかと思っていましたが、ここで一つネタバレを。

嫌な人はここで戻して下さい。

魏に一刀、蜀にライルが来ます。

ただし、一刀は設定弄るかもしれません。

呉04・相互理解の難しさ(前書き)

結局迷いに迷って本来より縮小、半年経って更新です。

これは流石にグダグダが過ぎますね。

本当にお待たせしてすいませんでした。

呉04・相互理解の難しさ

―その後、村を襲撃した犯人、黄巾党のメンバーを数人捕まえた。このメンバーは他の仲間にこの村の占拠を任された一部の者たちに過ぎない。

助けた女性から天の御使い様と呼ばれてお礼を言われた。

だが、俺の中ではやるせない気持ちが広がっている。

いくらこちらが分かり合おうと歩み寄っても、相手にも分かり合おうする意志が、気持ちが無ければ対話は成り立たない。

それは…本当に悲しいことだ。

特にすれ違いや誤解で成り立たなかった時が一番悲しい。

「あの…大丈夫ですか？」

いけない、これでは助けた女性に気を使わせてしまう。

「大丈夫だ、さあ帰りを待っている人たちがいるだろう？俺たちが護衛するから一緒に行こう。」

出来るだけ優しく話すように努める。気持ちが伝わったのか、女性は頷いてその場を後にする。

祭が無言だが、多分他にも『天の御使い』とやらがいることについて考えているのだろう。

だが今ここで考えても仕方ない。祭に声を掛けてこの後どうするかを聞いてみよう。

が、そこに右目に怪我を負った男性が現れ、左足を引き摺りながら俺の胸倉を掴んできた。

「あんたのこと見てたぜ。あんた、妖怪じゃねえのか？」

妖怪はこの時代で人々の畏怖の対象…つまりは化物と言いたいのだろうか。

「俺は、人間だ。」

ありのまま、自分という存在を述べるも男は納得しない。

「いいや、あんなこと出来るのは妖怪以外の何者でもない。だから、あんたも黄巾党の連中と同じ…ひっ！」

更にまくし立てようとした男の頭が突然鷲掴みぬいされて強引に右に向けられた。それを行った祭は男の眼前に予め鞘から引き抜いた剣を突きつけながら、殺気を剥き出しにして男を睨んでいた。

「無礼者！この方は我が国を救う天の御使い様だ、今この方に謝罪せねば即刻首を刎ねることになるぞ！！」

凄みのある声色で警告する祭に、男は恐怖と罪悪感に一気に支配されて地べたに座り込み、俺に土下座をする。

「あ、アンタ…いえ、貴方様がて、天の御使い様だったとは知らなかったとはいえ大変失礼致しました。もう二度と先程のような無礼は働きませんので、どうか首を刎ねるのだけはお許し下さい…。」

祭の心から俺に対する敬意と俺を化物扱いされたことへの憤怒が読み取れた。そして、本来なら即首を刎ねたいが、俺がどうするかを見るために敢えてやらなかったという実践主義な祭らしいやり方だった。

「…祭、剣を納めてくれ。これでは対等に話せない。」

この際だから、俺のやり方を見せておこう。

「しかしセイエイ、許していいのか？」

祭は俺に頼まれても剣を収めない。

「俺たちは力で屈服させるやり方を出来る限り、取ってはいけない。そうでなければすれ違いや誤解で相手の本当の気持ちも考えも解らなくなってしまう。武力を使うのは分かり合う手段も気持ちも通じなかった時だけだ。」

「そうは言うが、こやつのようにあのような無礼を言われて許せると思うのか!？」

祭の目が俺を射抜かんばかりに反感の意を示す。

「自分の理解の範疇を超えたものを見せられれば、すぐに認めて受け入れるのは難しい。だからああいう時は、自分が怒るのではなく

相手に矛を向けることはないということを示さなければならない。」

俺の説得に、祭は剣を鞘に収め、踵を返す。

「……分かった。じゃが、この男がまた無礼を働いた場合は、問答無用で斬り捨てさせてもらう。」

祭の中では未だに男に対する怒りが収まってないが、それでも抑えているあたり、今のが最大限出来る譲歩なのだろう。

その後、無事に女性を無事に届け、村での被害を確認する。

家屋は、ほとんど焼失。老人は全滅、男性もさつき俺に詰め寄った男以外全滅、子供は数人が怪我しているものの無事、女性は助けた女性以外連れ去られた。

酷い有様だ……。

「これでは、村に女性たちが戻っても成り立たんな。しかもやり口からして、目的は村の女を連れ去ることだったようだ。……許せん！！」

悔しさで拳を潰さんばかりに握る祭。

きつと黄巾党ということ以前に同じ女性として許せないのだろう。

「なら、急いで助けに向かおう。動かなければ、何も始まらない。」

「そうだな、では部隊を……。」

「いや、行くのは俺と祭だけだ。」

俺の言葉に祭の表情は驚愕に染まる。

「待て、いくらなんでも無茶だぞ。何百といえるかもしれないのに……。」

「

「奴らがまともならそうしたが、女性たちが監禁されている限りは俺と祭で行ったほうがいい。」

「そうか……分かった。なら急いで……何の用じゃ？」

祭が俺の後ろを睨んでいたために俺も後ろを振り向いたらさっきの男が抜き身の短剣を持って立っていた。

「あの……これを御使い様に。」

さっきの男が俺に短剣を差し出した。

その短剣は柄に手アカなど使い込まれた跡があるが、綺麗に磨き込まれている。

「何故俺に？」

「連れ去られた娘たちの中には俺の妹と妻がいるんです。ですが、腕がこんな状態では助けにもいけません。お願いします、どうか妻と妹を助けてください!!」

男が土下座をして懇願する姿に俺も祭も困惑している。

だが、いかに悔しいか、いかに自分で家族を助け出したいかが伺える。

「大丈夫だ、言われなくてもそうする。だが、この短剣は預かる。^{たましい}

「あ……ありがとうございます!!」

お礼を言う男を背に祭に近付く。

「なるほど、少しおぬしが言っていたことが分かったぞ。なら……だれがある!」

「はっ!」

すぐ近くの兵がこっちに近付いてきた。

「さっきの話は聞いていたな。わしらが帰ってくるまでこの村の護衛をするのじゃ。」

「御意!」

二の句も言わず下がる兵。

つくづく思うが、祭が指揮する部隊は彼女を心底信頼しているようだ。豪胆で面倒見のいい祭ならではということか。

「では、行こう。」

祭の言葉に首肯で返し、急いで馬がいる村の入り口へ向かった。

.

呉04・相互理解の難しさ（後書き）

次は黄巾党討伐です。

その次は、雪蓮との日常の話にしようと思います。

呉05・黄巾党討伐（潜入・救助）（前書き）

お待たせしてすみません。

また間が開いてしまい、これが今年最初の更新になります。

ただ、今回はもしかしたら所々で雑なところがあるかもしれません。

今回、本当はバトルもちゃんと書くつもりでしたが、更新を優先して肝心なvs黄巾党約100人のところは次回に持ち越します。

なお、後書きは祭が何をしているのか書いておきました。

呉05・黄巾党討伐（潜入・救助）

「刹那」

村を襲撃した黄巾党の一部隊は、約2km離れた場所の廃棄された城に立て籠もっていた。

「どうする刹那？ 僕は火矢で火を掛けて敵を炙り出すのが良いと思うのじゃが。」

洞穴だと俺はともかく祭の弓矢での援護が期待できなかったが、城であれば内部さえ入ればどうにかなる。

問題は、いかにして攫われた女性たちを救い出すかだ。

「それは駄目だ。女性たちが煙で窒息してしまう恐れがある。それでは意味が無い。城に敵だけが立て籠もっていたのなら有効だが、この場合は悪手にしかない。」

「なら、どうする？」

「俺が潜入し牢を破壊、攫われた人たちを逃がす。逃がしたら外に出て光の柱で合図を出す。」

光の柱はビームのこと。説明する時間も惜しいために割愛した。

「大丈夫なのか？」

「こついった単独任務には慣れている。それに……お前もいる。」

それはお世辞ではなく祭の弓の腕を信じているから言ったことだ。

そう言っていたら、何だかロックオン……ニール・ディランディを
思い出して懐かしくなった。

「そう信頼されるとのう……分かった、だが今回は話を聞くとかは
無しで頼むぞ。」

……いや、感傷に浸るのは後だな。

「その気はない。だが、お前も気を付けろ。」

意識を変えて、一人黄巾党の根城へと向かう。

城に入る前に、乗っていた岩影に馬を置いていった。

脳量子波で伝えたら、周辺の林で歩いているそうだから安心だ。

で問題は潜入する方法だ。

方法を考えたが、まず変装は祭に「お主のような面構えの良い男で
は野盗には向かん。」と却下された。正面突破など潜入の意味が無
い。

だから、城の何処から潜入する事にしたのだが、特に見つからず、
唯一見つけた裏口は流石に抑えられている。当然見つかる訳にはい

かないから、木の影に隠れて様子を伺う。

しかし、いるのは二人。片方は人相が悪く、もう片方は顎髭をはやしている。誰も来ないと思って油断しているのか、顎鬚の方は立ちながら寝ている。

時間が惜しい、すぐに排除する。

GNソードVをライフルモードにして、ビームを寝てない方の見張り番に射つ。ビームは壁を破壊しないように脳量子波で威力を制御しておく。

「ん、光が迫つ……。」

ビームは頭に命中、首から上を吹き飛ばし、石の壁を少し削る。首から先が無い骸が前のめりに倒れる。焼け焦げた断面のせい、血が流れ出ない。

一方の寝ている見張り番はまだ起きる気配はない。

これ幸いだ、いつ起きて騒ぐか分からない。その上、牢の場所を聞く必要がある。

間髪入れずに、寝ている見張りに接近し、一本背負いで倒してGNソードVの刃を突きつける。

「いだっ！何が……ひっ！」

「騒ぐな。質問に答えたら解放する。だが、騒げば首を刎ねる。」

見張りを任された男が目覚め、もう一人の見張り番の首のない死体と突きつけられている俺の剣を見比べて青褪める。少し可愛そうだが、拐われた女性たちを助けるためには必要だ。そう思いながら、男を冷淡に脅迫する。

「わ、分かった。」

状況を読んだ男は抵抗せずに首肯する。

「一つは、拐った女性たちはどこにいる？」

「ここを入ってすぐ左側に、ある地下へ降りる階段を降りると鉄の扉がある。だが、そこにも見張りがいるからそう簡単には、いかな
い……。」

「そうか。それとも一つ、反対側の道へ行けば貴様の仲間がいる訳だが何人だ？」

「大体100人だ。けど、あんた一人でどうにかなるもんじゃねえぞ。」

数は予想通りだが、村を襲った奴等は正直、反応も遅く大したことがない。

それにしても、この男は性格的に戦いに向いてないようだ。普通、敵であるはずの相手にそんな言葉は言わない。

「いや、烏合の衆程度なら殲滅することも不可能ではない。」

「……そこまで言うなら止めねえが、お前さんがどうなろうと知らねえぞ。ここを任されている頭は黄巾党でも好色で巨大な剣を使う危ない奴で有名だからな。」

まさか敵のリーダーの情報を喋ってくれるとはな。ここまで特徴が分ければこの攻略がよりやりやすくなる。

「それについては問題ない。だが、何故敵である相手にここまで喋る？」

「……元々孤立無援で官軍に追われ、黄巾党に入る以外に生きる道がなかったんだ。けど、あんなに横暴なやり方で生きていたつていつか官軍に討ち取られる。そう分かっちゃまってから抜ける機会を窺っていたんだ。だからこれを機に今すぐに抜けるさ。さっきのはその礼だ。」

さっきまで怯えていたのに、まるで憑き物が落ちたように清々しいぐらいに男は喋る。

「そうか、なら今すぐにここを離れる。」

男は笑顔で首肯してこの場を離れた。黄巾党が烏合の衆で横暴な集団とは言っても、状況によってそこに入らざるを得なかった人間がいることがよく分かった。

なら、俺に出来ることはないだろうか？

……いけないな、今は潜入ミッション中だ。急いで入ろう。

城内に潜入、難なく牢のある部屋へ続く階段を降りる。当然、足音を立てるなど論外、音を立てないように慎重に降りていき、階段を降りきるところで壁に身を寄せて部屋の様子を窺う。潜入されると思っていないのか一人しか見張りがおらず、青銅の鍵を円盤を回す要領でクルクルと左手の一指し指で回しながら遊んでいる。

そして、その男の背後には錆び付いているがおそらく鉄だろう金属で出来た格子型の牢屋に女性たちが揃って噉り泣きながら地べたに座り込んでいる。中には服を破かれた生傷や痣が見える人もいる。

……抑えろ、ここで殺気を出したら失敗する。そうなつては、最悪女性たちに犠牲が出てしまう。

「へへっ、お頭も気前がいいなあ。ここにいる女のどれか好きな奴を選んで犯していいなんてよお。」

男は邪悪な笑みを浮かべて後ろに捕まっている女性たちを見る。

どうやら、内容を察するに近く見張りを交替、攫った女性の誰かを連れて、言った通りのことをするようだ。……なら、何も容赦することもない。

右手に村の男から預かった短剣を持ち、投擲する。狙いは、左腕。額という手もあるが、当たっても頭蓋骨に阻まれて即死にならない可能性もあったため、敢えてその方法はしなかった。

「があっ！」

見事に命中、鍵を落とし悶え苦しむ間に接近する。

「くっ、くそがあっ！！」

だが、男が気付き、右手に腰の後ろにあつた短剣を取り出して突きを放つ。狙いは俺の胸だが、今その選択は間違いだ。容易く右に避けて、右手のGNソードVで斬り上げながら通り抜ける。

斬ったのは、男の右腕。肘から先が吹き飛ばされる。

「ぐああああっ！！！」

右腕を吹き飛ばされて怯む間に、GNソードVで男の首を刎ねる。

地面に転がった男の首は絶望に顔を歪ませた表情で事切れている。首を離された体は前のめりに倒れ、首と右腕から血が流れて池を作る。

俺は男の死体に歩み寄り、村の男の短剣を引き抜き、鍵も死体の近くから拾い上げる。

自分で殺しておいて言うことではないが、やはりやるせない。だが、その気持ちを他所に牢に近付く。

「あ……あの、誰ですか、うつつ……。」

20代ぐらいで服が所々破かれている女性が俺に尋ねるが、立とうとしてへたり込んでしまう。その女性をまだ幼さの残り、支えている女性と顔立ちの似ている10代後半の女の子が支える。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

どうやら、一人は既に手遅れだったようだ。服が所々破かれている女性から、僅かばかりだが奇妙な臭いがする。

「助けるのが遅れてすまない。俺の名前は刹那・F・セイエイ、襲撃された村からの依頼でお前たちを助けに来た。だが、見つからないように今は静かに聞いて欲しい。」

俺の言葉に全員首肯する。だが、姉を支えている女の子は慌てて口を塞ぐ。

「今から、俺は奴らに対して強襲を仕掛ける。お前たちはその間にここから逃げる。外には俺の仲間の黄蓋がいる。紫の服を着て弓矢を持って馬に跨っている女性だ。」

話を聞いた大半の女性たちは嘘じゃないということは分かってくれたが、女の子だけは納得してくれない。

「私は信じてない！余所者の男なんて皆汚いことばかり考えているんだ！お姉ちゃんを酷い目に遭わせた男なんて皆嫌いだ！！」

そうか、この子は村にいた男以外の男に姉を傷つけられて不信になっているのか。

「待つて下さい。その黄蓋という方はもしや孫呉の武将の黄蓋様ですか？」

「そうだ、俺は数日前に彼女たちの元に身を寄せている。」

「結ちゃん、この人はもしかして噂ゆづになっていた天の御使い様じゃないかしら？ほら、服装なんてあんな鮮やかな青はどこに探しても無いし、持っている剣も緑色の宝剣で噂通りでしょ。」

結というのはおそらく真名だろう。

しかしまさか、そこまではつきりした噂が流れているとは思わなかった。が、姉に諭された結と呼ばれた少女からさっきまでの警戒心から顔面蒼白で泣きそうな顔になっていた。

「あ、あの……み、御使いしゃま……も、申し訳ありません。どうかお許しを……。」

「気にしなくて良い。それより、すぐに出るんだ。」

GNソードVを後ろの腰の鞘に収め、短剣を収めようとする。

「御使いさま、その短剣は……。」

姉の方が短剣の方を震えた指で指しながら驚いている。

「ああ、村の男で唯一生き残った奴からお前たちを助けるという願いと共に借りたものだ。」

それを聞いた姉が更に驚き、涙を流し始めた。

「…御使い様、お願いです。私の友達を助けてください！つい先程、あの男たちに連れて行かれて……早くしないと男たちの慰み、者に……。」

ほんの数分前か。間に合うかどうか厳しいが……。

「分かった、すぐに向かう。とにかく、奴らに気取られないうちに出るんだ。」

結という少女の姉に両手を貸してどうにか立たせる。そして先に牢を出て、女性たちも牢を出てくる。

… 出口側から足音。

「ちっ、そこにいろ。」

出口まで駆け出すと、敵が短剣を振りかぶって来た。

「遅い！」

「し、侵入者、ぐはあっ……！！」

だが、相手はやはり素人で、振りがぶりが大きすぎる。お蔭でがら空きの懷に潜り込み、心臓に左手の短剣を一突きして絶命させる。

「すいません、御使い様。私の友達をお願いします。」

俺は頷く形で返事をし、進んで行く。

一度城に入った場所へと戻り、今度は入り口から右側の階段を登る。階段を登りきって木を骨組みに使い土で壁面を固めて造られた壁を伝いながら部屋の中を覗く。

そこには、百人ぐらいいるだろう男たちが宴会なのか、酒を飲み、食べ物を食い漁っていた。…いや、いくつか違うことがある。それは乾いて黒く変色した血の跡がある石造りの床と酒とも血とも違う異臭、そして……

「くっ、来るなあっ！」

「はははっ、逃げてても無駄だぜえ？」

「そうだぜ？お前は俺たちの女になるんだぜ、なあお頭？」

「げはははっ、ああそうだ。気の強え女ほど絶望した時の表情が最高に見物だからなあ。」

奥で衣服が破けて胸が露わになりながらも、逃げ惑う女性の姿があり、周りの男たちが逃げられないように囲いながら彼女をなめ回すように見て遊んでいる場面があることだ。

……あの女性が救助対象。そして一番奥で玉座だった椅子に座って加虐心を表す言葉を吐いた男が、このグループのリーダーだろう。身長は190cmぐらい、筋骨隆々、床に切っ先を刺してある無骨

な大剣、大木のように太い左腕に巻きつけた黄色の布と他の者と特徴を比べるに事欠かない姿をしている。

今持っているのは、GNソードVと借りた短剣のみ。この現状を打開するには、奴らの目くらましをして素早く救助するのがベストだが、条件を揃えるものが手持ちにも周囲にもない。

何か無いかと焦り、何となく持っている短剣を見る。

投擲に使い、血が付着しているというのにその短剣は壁を照らす松明の光を反射して光輝いている。

茶色の手袋で刀身を挟んで血を拭き取るとさっきよりも光を反射している。

この短剣にビームを発射して一瞬でも目くらましに出来れば或いは……！

だが、加減を間違えたら短剣を蒸発させるだけに終わってしまうかもしれない。

「いやあっ！」

「捕まえたあー！」

……迷っている場合じゃない！！

様子を見るのを止めて、女性の元へと駆け出す。

「んぐっ！？なっ、何だてめえ！！」

一番入口に近い場所で肉を食べていた男が最初に気付いて叫ぶがもう遅い！！

「はっ！！」

短剣を女性の真上へと投げ、ライフルモードにしたGNソードVから少なめの威力でビームを放つ。

クルクルと回転する短剣の刀身に丁度当たり、ビームが閃光となって拡散される。

「ぐああっ、目がああああああ！！」

「何が起こつて、ぐあっ！！」

俺は下を向きながら、邪魔になる敵を切り伏せ、救助対象である女性の元へ辿り着き、左手で抱きかかえる。

「きゃあっ！！」

そしてGNソードVを仕舞い、落ちてきた刀身がボロボロな短剣を空中で掴んで、入口へと走る。

「くそっ、見えねえ！！」

「あっ、待て！！」

一部目を瞑りながら追いかけてくるが、俺には追い付いていない。

「くらえっ！」

だが一人、目くらましを凌いだ敵が縦に斬りつけてくる。

「どけっ。」

俺は女性に剣が当たらないように配慮しながら横に少し避けて、持っていた短剣ですれ違い様に敵の脇腹を斬る。

だが、斬った際に骨が当たっていたのか短剣に罅が入る。それでも振り抜き、短剣の刀身が折れてあらぬ方向へ飛んでいってしまった。

「あのっ…！」

入口に着いたところで女性を下すと声を掛けてこようとしたが、手で制する。

「喋る前に早く逃げろ。牢にいた女性は解放したから、早く合流するんだ。あと、この短剣をお前の夫に返して、役に立った伝えておいてくれ。」

喋りながら、女性に僅かしか刀身が残っていない短剣と俺のソレスタルビーイングの制服の上着を渡す。

「……ありがとうございます。そして、死なないで下さい！」

女性は頭を軽く下げて、その場を後にする。

「そのつもりだ。」

女性が去るのを見送った俺は、入口近くの天井に向かって威力の高いビームを撃ち、城の瓦礫を落として入ってきた場所を塞ぐ。これは、祭への突入の合図も兼ねている。

敵の方を見るとほとんど目を覆っているが、一部は既に剣、槍、斧、弓矢を構えて警戒している。

「ぐつ、くそつ、まだよく見えねえ……がはっ！」

そこに、先程まで玉座に座っていたリーダーが目を覆っている自分の部下を大剣で切り捨てながらこっちまで歩いてきた。

「この野郎、よくもやってくれたなああっ……！」

そのリーダーは怒り心頭で今にも切り捨てようと構えている。

「それは俺の、いや、貴様達に襲われた村の人達の台詞だ。何故、村を襲った。」

静かに、そして怒りを込めた言葉をその場の全員にぶつける。

「決まってるだろ！俺たちが食ったり女を犯したりするためだろうが……それを邪魔しやがって……野郎どもおおおお、こいつを血祭りに上げてあの村を今度はぶっ壊すぞおおおお……！」

「……おおおおおおおお……！！！！」「」「」

俺以外の全員が雄叫びを挙げて襲いかかってくる。

そのエゴでどれだけ多くの人々を傷つけても、その痛みを解ろうとしないのだな。

ならば……

「貴様らのその歪み、この俺が断ち斬る!!」

「ぶっ殺せええええええええ!!」

「「「「「うおおおおおおおおおっ!!!!!!」「「「「「

T o b e c o n t i n u e d . . .

呉05・黄巾党討伐（潜入・救助）（後書き）

祭side

儂は、裏に回り込んで侵入した刹那を信じて少し離れた林に隠れて城の様子を窺っていた。

当然、見つかつてはまずいので馬からは降りておる。

門番は門の傍に二人いるだけ。しかも話していて番をしているにしては緊張感がない。だからその場で矢を放ち、門番二人の心の臓を貫いておいた。

が、何故か裏から一人城を出てきた敵がいた。

まさか、刹那の潜入が失敗したのか？幸いあつちは儂には気付いておらん。

なので、儂はその男にも矢を放ち、見事頭に当たり仕留める。

すると、裏から今度はさらわれた女たちがこっちに向かって走ってきた。

慌てて林から出ると、儂に向かって来る。

「はあ、はあ、はあっ……あの、孫呉の黄蓋様で在らせられますか？」

服が破けて、足を震わせている村の娘が声を掛けてきた。

「そうじゃ。」

「お願いします、御使い様をお助けしてください！私の友達をお一人で助けに行ってしまうて……！！」

分かっておったが、やはり不味いのお。いくら刹那が強くても万が一命を落とすことになっては策殿に顔向けできん。

「分かった、すぐに……！！？」

大きな音がしてその方向を見ると、光の柱が天へと昇って行くのが見えた。

どうやら、いよいよ討つようじゃな。

「あれって御使い様の……！！」

「どうやら攫われたものは全員助けたようじゃな。おぬし達はそこにおれ！！」

儂もそのまま城に向かって走っていく。

儂が行くまで生きているんじゃぞ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7034o/>

蒼穹と紅蓮のクアンタム

2012年1月15日01時52分発行